様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ７ 月　 ７ 日現在

機関番号：３２６３３
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ１５９３７

研究課題名（和文）医療グローバリズムを醸成するトランスカルチャラルナーシングシミュレーションの開発

研究課題名（英文）Development of Transcultural Nursing Simulation program for fostering globalization of healthcare

研究代表者
五十嵐　ゆかり（IGARASHI, Yukari）

聖路加国際大学・大学院看護学研究科・准教授

研究者番号：３０３６３８４９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は医療者の外国人対応力の獲得のための『トランスカルチャラル・ナーシング・シミュレーション』の教育プログラム開発であった。プログラムは、主にファーストコンタクトやコミュニケーションのつまづきの改善を目的とし、ケア場面の動画を視聴した後に改善方法を考える演習とした。動画の内容については32名の看護職から評価を得た。その結果、院内研修などの教材として役立つかについて「とてもそう思う・そう思う」と31名(97%)が回答し、またVASの10段階で、内容の満足度7.7、学びの満足度8.4と、プログラムの適切性や実現可能性に高い評価を得た。今後はプログラムを精選し広く公開していく予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
近年の日本における外国人の人口潮流をみると多様な背景を持つ生活者が増加しており、今後医療の現場でも同様の状況になっていくことが予測される。医療現場では主にコミュニケーションがうまくいかないことで適切なケアにつながらないことが大きな課題であり、そのことによって外国人患者も看護者もケアに対する満足度が低いことが多い。またコミュニケーションの障壁からトラブルに発展してしまい、健康に害を及ぼすこともある。これらの課題に対応する本シミュレーション教育プログラムにより、変化していく社会状況に対応する看護者の人材育成、ケアの質の向上、安全な医療を提供するためのリスクマネージメントにつながるといえる。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to develop an educational program on “Transcultural Nursing Simulation” for medical professionals for them to acquire the ability to handle foreign patients. The main aim of the program was to improve the first meeting and communication difficulties. Thus, it involved an exercise to think of ways of improving these aspects after watching care situation videos. The video contents were evaluated by 32 healthcare staff. Of these 32 participants, 31 (97%) responded that they “strongly agree or agree” that the program contents would be useful as teaching materials for in-hospital training. On a visual analog scale of 1-10, the program was highly evaluated for its appropriateness and feasibility, with a content satisfaction rating of 7.7 and a learning satisfaction rating of 8.4. In the future, the program contents will be carefully selected and made available to the public.

研究分野：異文化看護、ウィメンズヘルス、母性看護学、助産学

キーワード：多文化共生　外国人　シミュレーション　教育プログラム

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

外国人人口の流動が恒常的に増加している中、2012 年に厚生労働省の支援事業を基盤とした外国人患者受け入れ医療機関認証制度（JMIP)が開始された。このように外国人への安心、安全な医療の提供を推進しているにもかかわらず、現場での対応は課題が多いのが現状である。

外国人医療における課題は（1）言語・コミュニケーションの違い（2）情報不足（文化慣習、社会経済、医療制度の違い）の 2 つに大別される。特に、言語・コミュニケーションの違いは注目され、多言語ツールや医療通訳者の育成などの支援体制は進んでいる。しかし、解決すべき課題は、実は、情報不足である。これに対する看護者への支援が整備されていないことから、非常に困惑が強い。その多くは、外国人の状況を理解できず寄り添うことが困難であるために起こりうる課題の予測ができず、ケアのたびに問題を招いてしまう。例えば、説明や指導の不十分さ、異文化に対する苦手意識や無関心な態度、などによる関係の希薄さ、あるいはステレオタイプな観念によるケアの質の低下（林ら、2002；新實ら、2004）等である。

研究代表者の五十嵐は、外国人女性は、言語・コミュニケーションの障壁を軽減する支援以上に、自分を患者として尊重する看護者を切望している、という研究結果を得た（Igarashi et al, 2013）。つまり、同じ言語を話すことより「看護者の態度が課題」ということである。このことから、看護者へのトランスカルチャラル・ナーシングの教育は、問題解決のために必須であると考える。しかし、これまでの教育は、会話が成立することへの注目や受動的な学習方法でのプログラム展開であり、外国人対応への能力の獲得には結びつかなかった。そのため、新しい視点と方法を用いたプログラムが必要であると考えた。そこで本研究は、これまで効果的なプログラムがなかった外国人対応に対して、シミュレーション教育という新たな発想を取り入れ、実践的なプログラムの開発を目的とする。以上が着想に至った経緯である。

２．研究の目的

本研究の目的は「外国人対応力」の獲得をめざし、シミュレーション教育を導入した医療グローバリズムを醸成する『トランスカルチャラル・ナーシング・シミュレーション』の開発を行うことである。

３．研究の方法

（１）『トランスカルチャラル・ナーシング・シミュレーション』教育の開発

①事前学習の開発、プログラムの試作、プログラムの評価の検討

②本調査とデータ分析

（２）『トランスカルチャラル・ナーシング・シミュレーション』教育の評価

アンケート調査によって、プログラムの評価を行う。

４．研究成果

（１）プログラムの内容と提供方法の検討

先駆的にプログラムを長年展開している施設（アメリカ、ボストン、マサチューセッツジェネラルホスピタル）を訪問し、プログラムを作成、提供している担当者からプログラムについて説明を受け、その後、『トランスカルチャラル・ナーシング・シミュレーション教育プログラムへの応用についてディスカッションした。このプログラムを参考に、参加者のレベルに合わせた教育プログラムを、初級、中級、上級、プロフェッショナルの 4 段階に分けてコースを作成し、各コースには到達目標を設定した。教育プログラム参加の事前の準備として、医療者が外国人医療に関する自己学習を行うためや継続的に情報収集ができるように、ETHNIC（Education and Training for Healthcare Professionals to Foster Multicultural Coexistence）という名称で WEB サイトを作成し、公開している。

（２）動画の検討

トランスカルチャラル・ナーシング・シミュレーションの教育プログラムは、当初の予定では対面での研

修会としての構成を考えていたが、病院施設に勤務する医療者のアクセスのしやすさを考慮し、オンラインプログラムに変更し、主に動画を使用することとした。また、プログラムの目的は、外国人患者への印象や状況の理解への変化とファーストコンタクトやコミュニケーションのつまずきの改善とした。教材となる動画の内容についてと、動画と演習を組み合わせた構成について、プログラムの適切性とオンラインプログラムの実現可能性についての評価を行った。各動画には、視聴後に内容に関する質問を作成し、振り返りの機会を設ける構成とした。動画の内容によって異なるが、振り返りのための質問はそれぞれ7～10 問とした。対象者は看護職、評価方法はアンケート調査とした。対象者の属性は、助産師 28 名、看護師 4 名、平均年齢 33 歳、平均経験年数 9.6 年であった。対象者の背景として「働いている医療機関で外国人患者さんを見かけることはありますか？」に対し、ほぼ毎日が 19 名（59.4%）と最も多く、さらに「外国人患者のケアにあたる頻度」について、ほぼ毎日が 6 名（19.4%）と、外国人患者に接している人が多かった。しかし「外国人のケアにおいて困難を感じている」と回答した人が 30 名（96.8%）と、ほとんどの人が回答していた。

① プログラムの適切性

・結果 - 1:外国人患者への印象や状況の理解への変化

アンケートは、動画視聴のpre-postで回答してもらった。「外国人患者へ自ら話しかける」は、強くそう思う、そう思うがpre18名（56.3%）であったが、post28名（87.5%）と変化していた。また「外国人患者に先入観を持たずに接する」は、強くそう思う、そう思うがpre24名（75.0%）であったが、post31（96.9%）とほどんどの人が回答していた。しかし、「外国人患者に苦手意識がある」は、pre-postともに17名と変化がなかったが、強くそう思うがpre6名であったのが、postは3名へと変化はあった。

・結果 - 2：外国人患者とのコミュニケーションへの変化

大きく変化したのは、「外国人患者に日本語以外の言語で話しかけられたとき、まずは英語で応える」に対し、強くそう思う、そう思うがpre25名（78.2%）であったが、post7名（21.9%）に減少していた。また関連して「外国人患者とのコミュニケーションは英語であれば成立する」はpre7名（21.9%）であったが、postは0名と外国人患者とのコミュニケーション＝英語という印象が変化していた。また、「コミュニケーションを図るうえで、同じ言語を話すことはもっとも重要である」は、強くそう思う、そう思うがpre22名（68.8%）であったが、post13名（40.7%）に減少し、同じ言語ではなくてもコミュニケーション方法があることを認識していた。さらに「外国人患者に日本語で話しかける必要はない」は、そう思わない、全くそう思わないがpre27名（84.4%）であったが、postではpost31（96.9%）と、ほどんどの人が回答し、言語が異なっても避けることなくまずは日本語で話しかけてみる、ということを意識していた。

② プログラムの実現可能性

・結果 - 1：満足度

動画全体の満足度はVASの10段階で7.7、学びの満足度は8.4であった。また自由記載から、「実際にある場面だと思った」「自分も体験したことがある場面だった」など、臨床現場の状況が反映されている内容であるという記述が多かった。また、それぞれの動画の長さを3分程度にしたことで「集中できた」「飽きずにみれた」という記述もあった。しかし、各動画への振り返りの質問に対して「適切なものもあるが、多いと感じるものもあった」という記述もあり、振り返りの質問の内容や質問数は検討が必要である。

・結果 - 2:実現可能性

動画の内容がわかりやすいかについては、とてもそう思う、そう思う、と31名(97%)が回答した。また臨床でのケアに役立つかについては、とてもそう思う、そう思う、と31名(97%)が回答し、さらに院内研修などの教材になりうるかについても、とてもそう思う、そう思う、と31名(97%)が回答した。これらの結果から、プログラムとしての実現可能性について高い評価を得たとともに、動画がプログラムの主軸になりえる結果であった。今後は動画を精選し、汎用性のあるプログラムに構成し広く公開していく予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 五十嵐ゆかり	４．巻 3
２．論文標題 Massachusetts General Hospital(MGH)における医療通訳サービスの現状	５．発行年 2017年
３．雑誌名 聖路加国際大学紀要	６．最初と最後の頁 52-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） http://arch.luke.ac.jp/dspace/bitstream/10285/12970/2/SLIU_3_52-57.pdf	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計1件

１．著者名 大橋一友/岩澤和子　監修	４．発行年 2018年
２．出版社 MCメディカ出版	５．総ページ数 108 - 114
３．書名 国際化と看護 - 日本と世界で実践するグローバルな看護を目指して -	

〔産業財産権〕

〔その他〕

ETHNIC　https://www.ethnic.center/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考